# 白鳥の湖 異変

## ファントム」2羽が排除

## エサ不足？飛来数激減

## 見守る市民やきもき

コハクチョウ飛来の国内南限とされる滋賀県の琵琶湖南部で、冬の風物詩でもある白い優雅な姿が激減する異変が起きている。愛鳥家らが観察したところ、特定の2羽が縄張りを主張し、他の鳥を追い払っていた。エサ不足のせいなのか、ほかに理由があるのか。野鳥の研究家は「本来、仲のいいコハクチョウがなぜ」と首をかしげ、市民らは2羽を「ファントム」と名付けて、ハラハラしながら見守っている。

### 琵琶湖のコハクチョウ

琵琶湖では近年、300～500羽ほどのコハクチョウが、秋に4千キロ以上離れたシベリア方面から飛来し、翌年の3月ごろまで越冬する。

ところが、琵琶湖南部では今季、その姿がめっきり減った。滋賀県草津市の湖岸で観察を続ける環境ボランティア団体「草津湖岸コハクチョウを愛する会」によると、昨年11月7日に4羽の初飛来を確認し、2週間後には22羽に増えた。

会員たちは「過去最多だった昨冬の71羽を超え、100羽にも」と期待したが、12月15日以降は10羽にも届かない日が続いている。

一方、県北部の湖北町沖では、10月の初飛来以降その数が順調に増え、いまは例年並みの約250羽と、「特に異変はない」（湖北野鳥センター）。県西部の安曇川町ではやや少なめだが、それでも約70羽がいる。

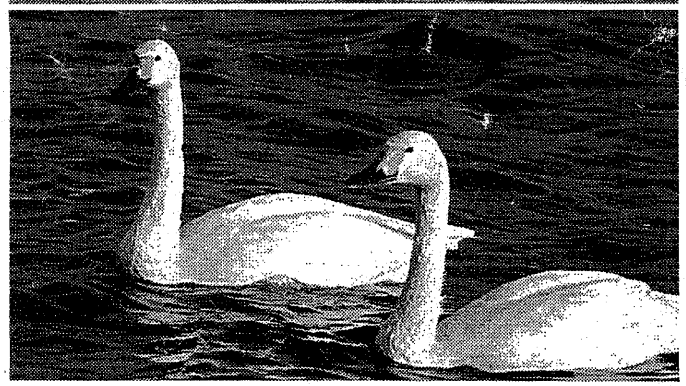
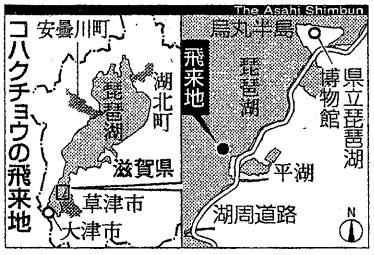
愛する会によると、草津市沖では11月26日、2羽と6羽のグループがくちばしで相手の体をつつく「けんか」をした。この時は2羽の側が逃げ去ったが、直後にこの2羽が逆襲を始めた。

会員たちは、米軍の戦闘機の名から2羽を「ファントム」と命名した。普段は、仲良く水面で寄り添っているが、他の鳥が近づくと、飛びかかり、追い回す。12月11日には今季最多の36羽が確認されたが、やはりファントムの猛攻が始まり、翌日には2羽だけになっていた。

愛する会理事長の松村から縄張りを主張している」と見る。降水が多く、琵琶湖の水位がマイナス20センチ前後と昨冬より60センチほど高いため、水中に首を入れてもエサの水草に届かないという。湖北町沖も水位の事情は同じだが、エサの落ち穂や草の根がふんだんにある。対して、県南部は宅地化で田畑が減ってそれも少ない。

琵琶湖にコハクチョウが初飛来した71年ごろから観察を続ける琵琶湖水鳥・湿地センター専門員の清水幸男さん(52)は「越冬中、コハクチョウが他の鳥をしつこく追い払うなんて見たことがない」と驚く。

日本野鳥の会普及室チーフの景山誠さん(32)も「あまり聞いたことがない。暖冬のほか、エサ場や琵琶湖周辺の環境の変化も考えられる」と指摘。山階鳥類研究所研究部長の柿沢亮三さん(59)は「エサ場を守ろうとして、他の鳥を威嚇する習性はコハクチョウでもみられる。それが顕著に表れたケースではないか」と話している。



㊤コハクチョウの体をくちばしでつついて追い払う「ファントム」の1羽＝1月3日
㊦湖面で寄り添う2羽の「ファントム」＝いずれも滋賀県草津市で、草津湖岸コハクチョウを愛する会提供